

第3章

調査結果

1. 児童館訪問調査
2. 利用者アンケート調査
3. 元利用者へのヒアリング調査
4. 児童館関係有識者へのヒアリング調査

第3章 調査結果

各地の児童館における活動の検証・分析方法やプログラムに対する考え方等を把握するとともに、「遊びのプログラム」を支える日常活動の具体的な内容と児童厚生員等の専門性を明らかにするため、全国8か所の児童館を訪問し、活動場面の視察及び施設長等へのヒアリングを実施した。

また、利用者（乳幼児・保護者、小学生、中・高校生、他）の状況やニーズを把握するとともに、プログラムの捉え方や効果等を調査するために、各児童館の協力のもと利用者アンケートも実施した。

1. 児童館訪問調査

(1) 児童館訪問調査の内容と方法

児童館訪問調査にあたっては、平成29年度（2017年度）に実施した『児童館等における「遊びのプログラム」の開発・普及に係る調査研究業務』における協力児童館の他、平成29年度（2017年度）児童健全育成賞（数納賞）等を受賞した児童館等、活動に対して一定の評価が得られている児童館の中から、地域バランスに加えプログラム内容や施設規模を考慮しつつ8か所を選定した。

【訪問調査協力児童館】

- ① 宮城県石巻市子どもセンター「らいつ」
- ② 新潟県立こども自然王国
- ③ 長野県松本市 寿台児童館
- ④ 愛知県児童総合センター
- ⑤ 京都市 明德児童館
- ⑥ 神戸市 六甲道児童館
- ⑦ 愛媛県久万高原町 NIKO NIKO館
- ⑧ 福岡市立中央児童会館「あいくる」

【訪問調査の基本的な流れ】

- ・ 研究会委員2～3名と現地スタッフ1名（記録担当）で児童館訪問。
- ・ 施設概要についての説明を受けた後、施設見学。
- ・ 施設長等にヒアリング。
- ・ その後、時間の許す限り活動場面の観察。

【活動場面の観察の要点】

遊びのプログラムを企画実施する際に求められることや日常的な活動において児童館が

大切にしていることに加え、児童館の空間的な状況等について把握することを目的として、以下の観点から観察を行った。

- ・ 児童館長の、来館者や職員等との関わりの様子。
- ・ 職員の来館者への関わり方や、職員同士のコミュニケーションの様子。
- ・ 来館している子どもや保護者等の様子。
- ・ 児童館の空間的な状況や雰囲気。

【館長・児童厚生員等へのヒアリング項目】

あらかじめヒアリング項目をお伝えし、基礎資料をそろえて送ってもらった上で、以下の内容についてヒアリングを行った。調査票は資料として末尾に添付する。

- ・ 児童館等の概要、周辺環境。
- ・ 日常的な利用者の過ごし方や職員の関わり。
- ・ 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について。
- ・ 児童館における「遊びのプログラム」について
(捉え方、内容、展開過程で大事にしていること、評価方法、等)

なお、次頁以降の(2) 児童館訪問調査の結果において、ヒアリング対象者の敬称は省略させて頂いた。

(2) 児童館訪問調査の結果

宮城県石巻市子どもセンター「らいつ」

訪問調査日 平成30年12月8日(土)

ヒアリング対象者 宮城県石巻市子どもセンター「らいつ」館長 荒木 裕美

訪問調査者 岩田、井垣、野中、野澤、中村

I. 概要

1. 児童館等の概要について

(1) 施設規模

種別：小型児童館

児童厚生施設スタッフが若く、開設当時のメンバーも多い。施設全体に活気が感じられた。乳幼児親子、小学生、中高生、学生、大人、おばあちゃんと、あらゆる世代の利用がある。全体に新しい。床暖房で居心地がいい。空間作りを工夫している。子どもから出たアイデアに従って、遊べる部屋やスペースを螺旋状に配置している。壁紙をはらず、電気の配線もむき出しのままで見せる作りになっている。受付の前の空間をあえて乳幼児のためのスペースにし、多くの人と関わるきっかけを作っている。



ヒアリングの様子

(2) 運営組織

公設民営（指定管理者制度導入）いしのまき子どもセンターコンソーシアム

→特定非営利活動法人 ベビースマイル石巻

特定非営利活動法人 子どもにやさしいまちづくり

(3) 開館年月 平成 26 年 1 月 19 日

<u>(4) 職員体制</u>	館長	1名常勤	児童厚生員	3名（内、主任1名）
	非常勤児童厚生員	4名（内、休日子育て相談員2名）		
	事務員	1名		

(5) 年間運営費 平成 30 年度 30,000 (単位：千円)

(6) 年間利用者数と、その内訳 (乳幼児・保護者、小学生、中学生、高校生、その他)

平成 29 年 利用者数 (団体、見学、行事参加等含む)

合計：27,228 人 (乳幼児 5,638 人、保護者 6,999 人、小学生 6,951 人、中学生 2,639 人、高校生 5,001 人)

(7) 年間活動計画・報告等

① 児童館の運営方針

5 つの基本方針を柱に、“子どもの権利の具現化”、“子育て支援”、“子どもの主体的な社会参加の機会”が芽生える場所であり続けることを理念としている。

基本方針 1.子どもの主体性を尊重する

子ども自身が生み出す遊びを基盤とした、人格の発達を重要視する。子どもが問題を解決していく姿や社会参加の経験の過程では、職員は子どもの声に寄り添い、伴走する役に徹する。

基本方針 2.子どもがありのまま安心して過ごせる居場所をつくる

石巻市子どもセンターが、子どもにとって「第三の居場所」であると同時に、「第三のおとな」がいる、セーフティーネットの場であることを重要視する。子どもの変化に気づき、子どもの課題を捉えることができるスタッフが常駐する。

基本方針 3.子ども参加を推進する

子どもが主体的に生み出す社会参加等を推進し、地域の理解を育むことを重要視する。

基本方針 4.子育て当事者がエンパワーされる場をつくる

親がエンパワーされた状態で、安心して 0～18 歳までの子育てができるように乳幼児期から、親子ともに子どもの権利に触れられる場、親同士の出会いの場、地域とつながる場として、肯定的なサポートをする。

基本方針 5.地域との連携協働を推進する

子どもの権利、子ども参加を地域に理解され、根づかせていくために、地域を巻き込んで活動し、まちの活性化に向けた取り組みを積極的に行っていく。

② 1 年間の活動計画

<石巻市子どもセンター条例>

(事業)

第 3 条 子どもセンターは、次に掲げる事業を行う。

- (1) 子どもの居場所を提供する事業
- (2) 子どもの健康の増進に関する事業
- (3) 子どもの育成を図る事業

- (4) 子どもの社会参加を促進する事業
- (5) 子育て支援及び休日子育て相談事業
- (6) 子どもと高齢者等との世代間交流事業
- (7) 子どもに関するボランティアの育成事業
- (8) 前各号に掲げるもののほか、子どもの健全育成のために必要な事業

上記の条文をもとに、6つの事業他を行う。

- | | |
|--------------|---------|
| 「子ども参加事業」 | 「乳幼児事業」 |
| 「子ども企画」 | 「移動児童館」 |
| 「子どもエンパワー事業」 | 「研修事業」 |

そのほか

③ 1年間の活動報告（まとめ）

平成30年度（4～10月）事業名と事業内容

「子ども参加事業」

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| ・子ども会議（利用方法について 他） | |
| ・まきトーク（意見交換会） | ・夏祭り（子ども実行委員が企画） |
| ・運営会議（まち作りクラブ・子ども会議
について 他） | ・ハロウィン祭り（お菓子集め等）
他 |

「子ども企画」

- | | |
|--------|-----------|
| ・お化け屋敷 | ・デュエマ大会 |
| ・UNO大会 | ・ボンバーマン大会 |
| ・逃走中 | 他 |

「子どもエンパワー企画」

- | | |
|-----------------------|------------------|
| ・青春力（恋愛話 他） | ・料理王（じゃがいもお菓子 他） |
| ・Earth Teens（屋上で野菜植え） | ・アトラボ（3Dアートペン 他） |

「乳幼児事業」

- | | |
|-----------|----------|
| ・音楽で遊ぼう | ・親子ではぴはぴ |
| ・ベビーマッサージ | ・パパ講座 |
| ・親子でほかほか | 他 |

「移動児童館」

- | | | |
|--------|--------|-------|
| ・稲井小学校 | ・蛇田公民館 | ・釜小学校 |
|--------|--------|-------|

「研修事業」

- ・子どもの権利赤ちゃんの権利
- ・多様な発達の子どもたちの自己重要感

そのほか

- ・地域連携（川開きけん玉イベント 他）
- ・企業連携（LION 手洗い教室 他）

(8) 自治体における児童館の位置づけ

- ・石巻市子どもセンターは、石巻市内唯一の児童館。
- ・地域の子ども、大人、行政との意見交換等から得た声を実現して設立された児童館であるという経緯や施設の内容は、外部からの評価も高く、子どもの権利を柱に、子ども参加で運営され続けている。

2. 周辺環境について

(1) 地域の状況（産業、地域特性、交通事情など）

石巻市は、全国有数の漁港を中心にした水産業や農業のほか、工業や「マンガ」を生かしたまち作りによる、商業にも力を入れている。

石巻専修大学や三陸縦貫自動車道の延伸などの影響による人口の流入が見込まれていたが、東日本大震災により、石巻市の人口は大きく減少。石巻市の総人口に占める 15 歳未満の児童数も、年々減少している。

石巻市子どもセンターは、石巻市の中心部（石巻駅から徒歩 10 分）に位置している。近隣の子どものみならず、車で来館する利用者も多いが、駐車スペースに限りがあるため、近隣駐車場の駐車料金を補助している。（近隣の市役所駐車場利用は無料。指定のコインパーキングは 2 時間まで無料。）

(2) 児童館と地域住民や地域組織とのかかわり

地域との連携事業を行っている他、『子どもまちづくりクラブ』では、子どもたちが地域の一員として、まち作りに取り組んでいる。

- ・石巻市子どもセンターが所在する立町大通り商店街のマップ作成
- ・東日本大震災を風化させないことを目的としたモニュメント制作
- ・水産イベントの実施
- ・石巻市の歴史を観光客に伝えるためのマップ作り

地域住民や地域組織への取材等も、子どもたちが行っている。

また、石巻市子どもセンターまで気軽に来られない子どもたちのために、移動児童館事業を行い、野外で遊ぶことを大切にしたい遊び場を、定期的で開催している。

(3) 子どもの育成環境

東日本大震災の影響により、子どもの遊び場だった公園に仮設住宅が立ち並び、避難のための転居によるスクールバス登校、転校、仮設住宅からの転居によるコミュニティの崩壊など、子どもの育ちに必要と言われる「時間・空間・仲間」が失われている。



間口が狭く奥行きが長い敷地を上手に使い、1階から3階までぐるぐる回りながら上下移動できる循環動線。

(4) 地域の中で児童館以外に子どもたちが利用できる、施設・機関・活動等

石巻市子どもセンターの指定管理者である“いしのまきこどもセンターコンソーシアム”には2つの代表団体があり、子どもが参加できる活動を行っている。

- ・ 特定非営利活動法人 ベビースマイル石巻
妊婦から未就園児までの親子に対する、子育て支援事業を行っている。
- ・ 特定非営利活動法人 子どもにやさしいまちづくり
市民・NPO・行政を巻き込んで、子どもが参加できる場をつくる活動を行っている。

(5) その他、地域の特徴

平成26年の開館当初から比べて、小学校高学年～高校生の利用が減少している。利用者数が落ち着いてきたと感じる一方で、小学校高学年対象の、魅力あるプログラムの実施や広報に取り組み、0～18歳までの幅広い子どもたちが利用できる環境作りに取り組みたい。

II. 訪問調査の結果

1. 日常的な利用者の過ごし方や職員のかかわりについて

(1) 乳幼児とその保護者の過ごし方と職員のかかわり

① 乳幼児とその保護者は、普段児童館でどのように過ごしていますか？

- ・基本的には親子で来所し、子どもの様子を見ながらゆったりと過ごしている。
- ・館内には階段などの段差やスロープがあるため、1歳くらいの乳幼児は館内探検をしている。付き添いは基本的には保護者だが、状況を見てスタッフが付き添うこともある。
- ・3～4歳頃の乳幼児は、好みの玩具や大型積み木などを楽しんでいる。
- ・月齢と発達に応じた遊びを楽しんでいる。

② 乳幼児とその保護者にかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 心地よく過ごしてもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・安心できる・ホッとできる空間づくり。
- ・安全面の配慮。
- ・職員が温かく迎えて、温かく送り出すこと。
- ・ママが職員と話しをしたそうな雰囲気やタイミングを見計らって、話をよく聞く。
- ・館内をどう使っているのかわからないママには、居心地のよさそうな空間を職員が案内する。
- ・“子どもの目線”“ママの目線”の両方を大切にして、児童館内で出会った子ども同士の関りや、それを見るママ同士の関係がスムーズに和むように、遊びの場に寄り添うこともある。
- ・乳幼児を抱えた母親たちは子育てに不安や戸惑いを感じることも多いので、いつでも気軽に相談できるようにさり気なく近くにいるようにしている。近づきすぎても良くない。そのときの状況にもよるが、母親たちが話したそうにしているときは、できるだけ話を聞くようにしている。
- ・子どもの権利を大事にするのがこの施設のコンセプトなので、母親たちとの会話でもそういう視点を盛り込むようにしている。子どもとうまくいかないときでもホッとできるようにちょっと子ども目線になって言ってみたり、反対に親目線で寄り添ってみたりと声掛けを工夫している。
- ・母親たちに寄り添うと同時に、母親たちに「子どもの発達」や「子どもの気持ち」についての理解を促すような働きかけをしている。母親たちの「子育て力」を向上させることが、母親たちを安心させることにつながる。
- ・荒木館長自身、らいつに出会ってまだ4年だが、子どもの視点に立って物事を観ることができるようになってきたことを自覚している。そうすると子育てをより肯定的に楽しく感じるようになってきた。



幼児の遊び場は明るい窓際の配置。



保護者はカウンター越しに子どもを見守ることができ、またカウンターに座った保護者同士が会話しやすいレイアウト。

(イ) 主体的にかかわってもらうために意識して行っていることは何ですか？

- ・乳幼児が大好きな“お手伝い”をしてもらうよう声掛けをする。
- ・“ママ自身が持っているスキルを使って活動したい”という希望があるときは、それが実現できるようアドバイスをする。

(ウ) 保護者同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・ママ同士が作っているサークルの活動で、児童館を利用できることをアドバイスする。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・チームワークを大切にしようという声を、常々発している。
 - ・気になる親子や子どもの様子に気づいたら、職員全員で情報共有をし、チームワークで支えて行こうと声を掛け合う。
 - ・親が職員に声を掛けやすく、悩みも話しやすい雰囲気は、職員の行動に余白があることから生まれるので、あえて館内をウロウロしてみたり、親子の近くで整理整頓を試みたりすることがある。
- ウロウロすることを専門技術と捉え、「余白」と表現している。

(2) 子どもたち（小学生や中・高校生）の過ごし方と職員のかかわり

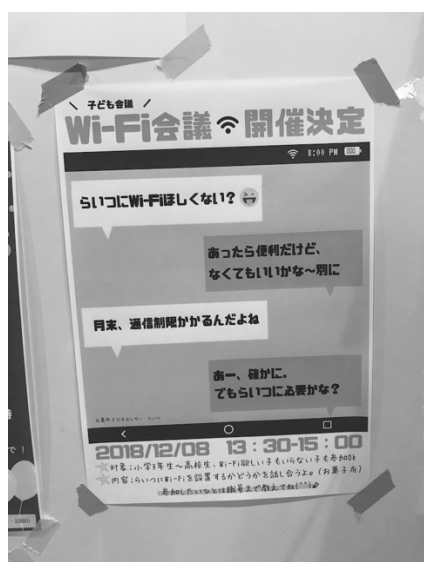
① 子どもたち（小学生や中・高校生）は普段、児童館でどのように過ごしていますか？

- ・それぞれが好きなことをして過ごしている。
- ・震災後の様子と比べて、子ども達の雰囲気には開放感がある。
- ・一人で来館した子には、普段他の子がしている遊びを話すなどして館内を案内すると、自然と好きなことを始めることが多い。

② 子どもたちとかかわる際に、児童館としてどのようなことに留意していますか。あるいは、どのような工夫をしていますか。

(ア) 居場所づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・みんなにとってゆったりと居心地のいい場所になるように、『子ども会議』の中で、子どもの視点でルール決め（冷蔵庫の使い方など）をし、子どもたちが必要だと感じる場合には、掲示をする。
→子どもたち自身に場作りを任せることによって、そこが自分たちの居場所になる。
- ・一人でいて寂しそうな場合には、職員から話しかけることもある。
- ・子どもから遊びに誘われたときは一緒に遊び、遊びを共有できる子どもとつなげることもある。
- ・子どもたちがひとりで過ごすことも大事にしている。誰かと遊びたいのに遊べなくて寂しくしているようであれば声を掛けるが、そうでなくて、ひとりで何かに集中しているときとか、自分の気持ちをこなしているようなときは、放っておいてあげる。



この日の子ども会議はらいつへのWi-Fi導入の可否。最初に職員からWi-Fiの概要のレクチャーを聞き、自由なディスカッションを行っていた。



(イ) 主体性を育むために意識して行っていることは何ですか？

- ・「石巻子どもセンター行動規範」にあるように、肯定する言葉を使い、職員自身が「私はこちら思う」という指針を持って、子どもと話すようにしている。
- ・子ども自身が気づいていない、一人ひとりの良い面を引き出して、気付けるような促しを、会話の中で行う。

- ・子ども一人ひとりの特性（性格等）は、気付いたら職員間で共有する。
- ・職員間での、子どもについての情報共有は、定期的なミーティング・気付いた都度・データに残すなどの方法を実行している。
- ・子どもについての情報共有は、先入観を持つことが目的ではない。常にフラットな気持ちで情報を受け入れるということを、職員間で確認し合っている。
- ・普段の会話の中で、子どもたちの主体性の芽があったときには、まずはスタッフがそれを「いいね」と肯定して引き出すようにしている。子どもたちはまだ自分の力に気付いていないところもあるので、「あなたのここがいいね」とか、「それってスゴイことに気づいたよね」という言い方で自信をつけてあげている。
→職員全体で「子どもの参画」「主体性の育成」を意識している点、そして、そのためのツールとして「会話」に重点を置いている点が重要である。
- ・あまり主体的になれない子に対しては見守りながら時期を待つようにしている。まずは関係を作って安心してもらって、いろんな会話の中で（主体性を）高めていく。

(ウ) 子どもたち同士の関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・子どもたちだけで遊びが成立しているときは、フェードアウトして見守るという姿勢を、職員間で共有している。
- ・館内での子ども同士のトラブルについては、職員とトラブルを起こしやすい子どもとの関係作りをベースにして、職員が子ども同士の仲を取り持つ役になることもある。
- ・中高生が企画するイベント（月 1 回「青春力（せいしゅんりき）」）は、みんなで鍋をするとか、そこで恋愛話に花を咲かせるとか、みんなの関心が高くて、ハードルの低いものになっている。そこで子ども同士が出会って、関係を作っている。

(エ) 施設や職員との関係づくりのために意識して行っていることは何ですか？

- ・意識して、話す時間を設けること。
- ・会話の中にある、“こんなことをしてみたい”という子どもたちの気持ちの種を、必要に応じて引き出したり、サポートしたりする。

2. 子どもや保護者の抱える課題と福祉的な対応について

(1) 子どもたちや保護者の様子について、気になることや対応していることはどのようなことですか？

- ・保護者が子どもを肯定できない場面に出会ったときに、子どもの視点を伝えるようにしている。
- ・子どもと距離を置きたくて来館する保護者の気持には、理解して寄り添う姿勢を、職員間で共有している。

(2) それに対して児童館として取り組んだ事例があれば、具体的なエピソードをお話してください。

- ・乳幼児同士のトラブルや、危険な行動に対するロールプレイングをしている。
- ・乳幼児に起きるトラブルについては、代表団体であるベビースマイル石巻と情報共有をする。
- ・不登校で、親に対する暴力行為があった子どもの事例では、保健師とも連携して対応し、結果はフリースクールに通うことになった。その過程では、いくつかの病院を受診するなど、さまざまな視点から解決する取り組みをし、児童館内では、子どもの理解を取りながら、親と子どもの気持ちを取り持つ役割を担うこともあった。
- ・石巻市では、保健師と他機関が協力するという体制がなかったので、これからの児童館と保健師間のネットワークや、情報共有の体制をつくっていく足がかりになった。

3. 児童館における「遊びのプログラム」について

(1) プログラムの捉え方

- ・「プログラム」という言葉は使っていない。
- ・過去には「遊びのプログラム」を、依頼を受けて実行ことがあった。具体的には、“子ども会議”や“子どもまちづくりクラブ”などの、子どもが主体の活動を「遊びのプログラム」として実施した。
- ・「子ども企画」（子どもが企画し、他の子ども 3 人に承認を受け、参加者を募って行う）が、現在の石巻子どもセンターでの「遊びのプログラム」に当たると感じる。

(2) 「遊びのプログラム」の内容

① 児童館で実施している「遊びのプログラム」を教えてください。

- ・石巻市子どもセンターでは、子どもが主体的に企画して実行する『子ども企画』が盛んに実施されている。子どもの心の中で企画が芽生えた段階から企画が実現するまでの過程での、職員の気遣い・働きかけ・サポート全てが「遊びのプログラム」だと捉えることができると感じる。
- ・職員が企画・実行するプログラムでは、子どもたちに伝えたいことを遊びに変換して、子どもたち自身が考える機会をつくり、より深く内容を伝えることができるような活動内容にする。
- ・職員が企画・実行した遊びのプログラムの例としては、平成 30 年 11 月に、「子どもの権利月間」という企画を実施した。子どもの権利条約全文を館内に貼り出し、子どもの権利に関する映像や絵本等も用意した。最後に子どもがクイズに答えると、お菓子がもらえるという企画。

② それぞれの「遊びのプログラム」のねらいと実施内容を教えてください。

- ・「子どもの権利月間」で出したクイズの内容（「遊びのプログラム」の実施内容）

「子どもの権利条約全文の中から、石巻市子どもセンターが大切にしていることはなんでしょう？」

- ・「子どもの権利月間」でクイズを出した目的（「遊びのプログラム」の狙い）
→石巻市こどもセンターでは、子どもの権利条約全文を大切にしている。つまり、どの条文を答えても正解なのだが、子どもが『子どもの権利条約』を知って、自分で答えをピックアップし、その答えに至った理由を自分の言葉にすることが狙い。

③ 「遊びのプログラム」の各展開過程で大事にしていること

① 「遊びのプログラム」を作成する際にどのような準備をし、どのようなことを大切にしますか。

- ・子どもが発した企画については、実現に向けて、職員が子どもたちの気持ちや行動に作用する、促す、リードする、見守るなど、状況に応じた働きかけをする。
- ・まずは話すことが大切。子ども達の心に芽生えたアイデア、こだわり、熱い想いを深堀していく。「子どもの心に火をつける」という言葉がいつも念頭にある。
- ・子どもの気持ちや行動には、それぞれのスピード感がある。その先に行かない。
- ・子ども自身が、“自分で考えた・行動した”と感じたときに、大きな自信が生まれる。子どものタイミングを見計らった働きかけをする。
- ・らいつには「子ども企画」という取り組みがある。子どもたちが自分のやりたいことを企画するのだが、「子ども会議」のメンバー3人から「みんなのためになる企画である」と承認されなければならないというルールがある。
- ・準備段階で大事にしているのは子どもたちとよく話をすること。「それってどういうこと？」「どういうところが好きなの？」などと、子どもたちの熱い思いをしっかりと聴いて、子どもたちの心に火をつける。その会話の過程が大事。
- ・1回の会話で「いいね、それ今度企画してみない！」とは言わないし、毎回来たときに「あの話なんだけどさ」と問いたですようなこともしない。話しているとこれ子ども企画になりそうだなと思うこともあるけど、その子のペースを尊重してあげる。上手にリードしてあげると、その子がやってみる！と思えるようになって、それがその子の自信につながることもある。そこはすごくリードが難しいところだと思う。

② 「遊びのプログラム」の実施中、特に配慮しているのはどのようなことですか？

- ・企画の中には、大人のアドバイスが必要な場面もある。例えば、“大人を巻き込んで、児童館として行う事業なのか”“子ども企画なのか”の判断など。子ども自身の判断やプランニングの手助けをする姿勢を崩さず、子ども主体で企画が完成するようにサポートする。
- ・企画当日に職員はつくが、企画の進行は子どもがする。
- ・企画の進行中に“やじ”が飛ぶなど、お互いの権利を大切にできていない行動が飛び出したときは、お互いが気づくように職員がサポートをする。

- ・企画書の作成もできるだけ自分の力でできるようにサポートしていくし、当日の進行も基本子どもがやる。スタッフが介入するのはトラブルがあったときや、お互いの権利に折り合いをつけるのがうまく行かなかったようなとき。
→子どもの発達段階を考慮して、職員が介入するべきときを明確に意識している。

(4) 子どもとの関りにおいて大事にしていること。「遊びのプログラム」を展開するすべての過程において、職員やボランティアが子どものかかわりにおいて大事にしていることは何ですか？

- ・企画に参加した子どもの中で、新しい企画のアイデアが芽生えた子どもがいるときは、次の企画につながるような声掛けをしてみる。
- ・基本的に、けんかは止めないようにしている。子どもたちが自分たちの身体とか、自分たちの言葉で折り合いをつけているので、止めない。なんで止めてくれなかったのですかという保護者もいるが、らいつの考え方を毅然とお伝えする。“子どもたちが自分たちの力で解決し、学んでいくのを見守る”という姿勢を崩さない。

(5) 「遊びのプログラム」の評価（効果の検証・分析）方法

① 「遊びのプログラム」は通常どのように評価していますか？

- ・子どもが企画した、“企画自体の出来”を評価することはない。
- ・職員が子どもの企画にどう関わったか、企画の場で子どもたちに学びや気づきがあったか、主催の子どもと参加の子どもがどう関わっていたのかなどを、子どもと職員の間、職員間でシェアする。
- ・例えば、企画の内容についていけなかった子どもがいた場合には、次からはどんな声掛けをすればよいのかを、職員間で話し合う。
- ・子どもたちの姿から学んだことや気づいたことを、職員間で共有する。
- ・行われた企画の中で、参加した子どもの主体性も引き出すことができたかどうかを確認する。
- ・職員が忙しくて事務室にいる時間が長いと、子ども企画が出てこない。反対に、企画がたくさん出てくるのは、職員が子どもたちとよく喋っていたとき。やはり、日常的に子どもと接して、会話を通じて働きかけることが重要だと感じている。
- ・子ども企画は、出てくればもう成功。
- ・職員企画のイベントは、職員が自分ひとりで考えると参加者が少ない。いろんな子どもたちと話しして、そこで出てきたキーワードをつないで、みんながこれは関心ありそうだなって作っていったイベントはやっぱり人が入っている。

② その評価はどのように活用していますか？

- ・“子ども企画”には、過去に承認されないものもあった。その理由を振り返ってみると、

子どもが企画を立ち上げたいと希望したものの、企画に対する熱が冷めてしまったり、テスト期間などの忙しい時期になってしまったりして、企画が進まずに終わってしまった例もあった。企画を進めるときのスピード感も大切だということ。

③ その評価は「遊びのプログラム」の改善に実際に役立っていますか？

- ・“職員が改善する”という意識ではなく、企画について子どもとよく話すことで、改善につながる学びや気づきを、子ども自身が得ることにつながっていると感じる。

④ その評価について改善すべき点があるとしたら、どのようなことですか？

- ・石巻市こどもセンターでは、子どもから企画が出た時点で、職員の普段の関わり（話をよく聞き、必要な関わりをすることができた）が子どもの主体性を引き出すことにつながった＝成功だと捉えている。
- ・職員が事業などで忙しい状態で、子どもとの関わりが不足しているときは、子どもから企画のアイデア（「遊びのプログラム」）が湧いてこない。そのような状態のときは、子どもたちの主体的な活動を促せなかったという意味で、改善点だと感じる。

Ⅲ. 考察

「石巻市こどもセンターらいつ」は東日本大震災で大きく被災し、地域、コミュニティ、住居、居場所などが崩壊、寸断されてしまった石巻市に震災後建てられた唯一の児童館である。設立の経緯は、生活基盤が全て津波により流されてしまった地域において、子どもたちが自由に遊べる居場所の必要性が明らかとなり、地域の子どもと大人、行政、外部からの専門家やボランティアの方々との意見交換などを重ねながら設立された児童館であり、施設の設計や運営内容を決めるプロセスには必ず子どもたちの意見を反映しながら進められた。

らいつでのヒアリング時に印象的だったのは、児童館の理念が明確で、その理念が運営方針として明文化され、共有されている事であった。その理念は日常的に職員の方達の行動の指針となっており、職員が来館する子どもや保護者にアプローチをする度毎に意識されるとの事である。例えばらいつでは館内のルールなども子ども委員会の意見を反映して作られている。ヒアリングの日は運良くこども委員会が開催される日となっていて、その様子を見学する機会を得た。この日の議題は「児童館内に Wi-Fi 機器を設置する事の是非」についてであった。「どのくらいのレベルのネット情報アクセスが子どもたちにとってふさわしいのか？」という問題は、私たち大人だけでなく子ども自身にとっても大切な問題なので、らいつのこども委員会がどのように会議を進められるのかを興味深く見守ることとした。

Wi-Fi 設置については「ネット情報アクセスの是非」に留まらず、子どもの知る権利という側面から、ポルノや暴力のような人権に関わる問題の情報規制までの非常に複雑な論議が求められる議題である。この日の子ども会議は冒頭に職員からインターネットや Wi-Fi のしくみについての解説があり、その後、子どもたちがネットアクセスの正の面、負の面につ

いての意見交換をしていた。参加した子どもたちは中高生から小学生まで。この日に結論を出すのではなく、まずはいろいろな意見を出し合う段階の会議であった。

その場での職員の果たしていた役割は「議論を活性化」したり、出てきた意見を整理する事に徹し、議論そのものについては子どもたちの主導に任せていた。このらいつにおいての「子どもの主体を尊重する」姿勢は、ヒアリング時にどの職員と話をしてその言葉の端々に現れていた。今後、らいつでの Wi-Fi 導入の是非がどのような形になるのかはわからないが、子どもたちが大人とともに考えて「最適解」を模索する経験が、将来その子どもたちの成長を大きく促す力となるであろう。

らいつでは、とにかく子どもの権利を大切に、子どもは一人の主体者であるという考えが根付いている。それが職員にだけでなく、子どもたちにも強く根付いている。子どもたち自身が「ここは自分たちの場所だ」と認識し、利用していることが素晴らしいことだと感じた。らいつは、サービスを楽しむ利用者とサービスを提供する職員という一方通行的な関係を越えようと模索している児童館であり、今後の児童館のあり方を考える上で参考になる児童館実践をしているのではないかと考える。

子どもの話を聴くときは構えずに、でも話のなかで突っ込んでいくことで、会話中にその子のこだわりを引き出し、その時のやりたいに寄り添っていくのが職員の役割だと語られている。職員の意図だけを押し付けないことが大切で、子どもにはやりたいタイミング、やれるタイミングがあるとの考えが職員の間で通底している。子どもの主体性に任せるといっても、ただ任せただけではなにも産まれない。子どもたちのやりたいをその都度引き出し、支えていくのが職員の役割である。

子ども企画それ自体の評価はしない、人数が集まったか集まらなかったか、極端なことを言えば企画が良かったか悪かったはどうでもいい、とまで語られている。大切なのは子ども企画実現へのプロセスであり、そのプロセスの中で職員の子どものとの関わりはどうだったかを振り返ることであるとのことだ。その振り返りの視点、自己評価、省察の深さが次の子ども企画へのサポートにつながっていくのだと考えられる。

また、職員が他の仕事に一杯いっぱいだと、子ども企画が減るとの話は印象的であった。子どもたちに対して丁寧なかわりが減るから、子どもたちからやりたいを引き出せなくなってしまうとの分析をされている。つまり、子ども企画が実現しているということは、子どもと日常的にしっかり関わっているということの証明でもある。

「石巻市こどもセンターらいつ」の建物は、設計段階から子ども達の意見を取り入れながら空間づくりが行われたという。雨や雪の日など外に出られない日でも児童館の中を自由に歩き回れるよう、子どもが発案した館内動線計画をもとに建築設計がなされた。館内は1階から3階までぐるぐると回りながら建物内を上から下まで歩ける循環動線となっておる。移動はスロープでも階段でも、あるいはエレベータでも上下移動できるイキイキとした楽しいジャングルジムのような空間空間が創り出されている。子どもたちが望んだ館内全体をエンドレスに巡回できる循環動線は、雨や雪などの外に出られない鬱々とした日でも、自由に

館内を歩き回る事で重たい気持ちを発散する効果がある。

乳幼児親子専用の場所を作らず、あえて空間ごとに利用者を分離することなく、いろんな世代の子どもたちが自然と関われるよう、共存できるような空間づくりを意識している。吹き抜け空間の動線沿いには、遊びに使える小さな空間が散りばめられていて、子どもたちが数人かたまって「たまれる」小さなスペースとなっている。吹き抜け空間を最上階から見下ろすと、それらの小さな「たまり空間」内には小集団ができ、思い思いにトランプ遊び、ボードゲーム、おしゃべりなどに夢中になっていた。個々の「たまり空間」で熱心に遊んでいる子ども達の姿を見ると、まるで引き潮時に多数現れるタイドプール(潮だまり)のごとく、多様でカラフルな磯の生態系が何層にも重なり共存している凝縮したマイクロコスモス(小宇宙)を覗き込む景色と重なって見えた。



壁板や床、梁、柱など木をふんだんに使い、塗装をせず木の素材を押し出した仕上げは、少しカジュアルな印象となり、吹き抜け空間との相乗効果で、イキイキとした活動的な空間を生み出している。



木に囲まれたシンプルな空間から一転して、赤一色で内装が設えられた個室も子どもたちの要望から生まれた。



子どもたちが発案した館内のキッチンも、暖色系で明るい印象の赤や黄色を使った内装となっている。



館内には子どもたちが「たまる」小さな空間が散りばめられていて、子ども同士が様々な遊びや使い方をしている。